

修士論文要旨

親鸞聖人の伝道と現代への対応

鷲 阪 恵 子

目 次	
序 論	
本 論	
第一章 親鸞聖人における伝道の本質	
第一節 伝道の意味	
第二節 現生正定聚について一即得往生ということ一	
第三節 宗祖の阿弥陀如来観	
第二章 現生正定聚の人生観	
第一節 『恵信尼消息』第三通について	
第二節 『恵信尼消息』第三通における対応	
第三章 医療現場における念仏者としての姿勢	
第一節 「やまおかクリニック」における念仏者のかかわり	
第二節 「常清の里」における念仏者のかかわり	
結 論	

宗祖が、越後から関東へ移住されてから800年がたとうとしている。宗祖が当時の人々に伝えたかったことが、現代の私たちに伝わっているのだろうか。宗祖は『歎異抄』第二条において、関東から命がけで上洛してきた御同行に、「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。」（『注釈版』832頁）と、法然聖人のおおせをこうむって信ずるほかに特別なわけはないといわれた。二葉憲香氏は、念仏すること、信を得ることが、社会的実践を呼び起こすのでなければならぬことを宗祖は強調したと述べている。念仏の教えを実践していく僧侶とはいかなる姿なのか。在宅医療と、特別養護老人ホームにおいての実習より考察していく。

序論においては、住職不在のまま、六人の世話役で運営する寺を取り上げた。この運営は、宗祖在世当時の関東の門徒集団と重なって見えたからである。初期真宗教団の形態を見ていくことで、現代の住職の意義をも考えさせられる機会ともなった。

本論においては、宗祖の伝道の本質を見極め、恵信尼様から見た夫の姿を通して、実習もふまえて、伝道とはいかなるものであるかを考えていった。真宗伝道の本質について、武田達誓氏は「謙虚で真剣な聞法、法を伝えずにはおれないその求道の過程が、人々の胸を打ち、人々の敬慕を得るのである。」と『通信教育テキスト・伝道』で述べている。

現生正定聚とは、正しく仏に成ることに決定しているなかまという意味である。宗祖においては正定聚は平生の信の一念に与えられる利益である。必ず往生し成仏することに決定するのは、臨終のときでなく平生（ふだん）であるので、平生業成ともいう。決して現生において涅槃のさとりを得て仏になることではない。

宗祖の人生観を『恵信尼消息』第三通に見ることができる。越後から関東に移住の途中に『三部経』の千部読誦を發願したが名号の他に何の不足でお経を読もうとするのだらうと思ひ返し、よむのをやめたと書かれている。これは『三部経』を千部読誦することよりも、名号によって呼び覚まされていくことの尊さを示している。如来の声を聴き続け称えていくことは、だれにでもできるたやすいことであるが、『三部経』を千回読誦することは、限られた人にしかできない。宗祖はだれにでもできるたやすい称名を伝えていくことを選んで流罪になった。真実の声、如来の声をすべての人が聴くことができることを伝えなければと、四、五日してやめられ、関東へと向かわれた。

他力の信に基づく実践は自信教人信によってはじめて成し遂げられると宗祖は確信していた。經典を拝読することは、自己を知り、如来の智慧が開発されていくことであることを、再確認したのである。

実習は、大分県の「やまおか在宅クリニック」でさせていただいた。ここでの実習中に、在宅患者に余命の宣告がなされた。この現場にこそ宗教者の存在が必要であると感じた。残念ながら私にはその力がなかった。たった一日だけの実習だったので、定期的な継続が必要であることを感じた。

特別養護老人ホーム「常清の里」では入所者の話し相手をした。80代の女性である。話もつき席を立とうとする私の手を握り呼び止めるのである。「いいから、そのままいいから。」私はそう言われて一時間ほど手を握ったまま過ごした。帰宅して気づいた。「いいから、そのままいいから」は如来の言葉ではなかったか。私の存在をまるごと受け止めていてくれたのではなかったかと受けとられた。

結論として、名号に呼ばれ続けている念仏者は「大会衆の数に入る」といわれる存在となる。大会衆とは、浄土の法座のことで、もともとは浄土に往生したものが阿弥陀仏の説法の会座につらなることを意味していた。これを宗祖は、現生において大会衆の数に入るといわれた。念仏申すとは、如来に呼び覚まされているということである。念仏者は、浄土に往生してからだ

けでなく、この世において他力の信に基づく実践を行うことになるのである。

「如来と等し」とは法の尊厳性を表す言葉でもある。我々衆生において、如来と同じ完全な利他行はできないがしかし、如来の願いによって得られるところの他力の信に基づく利他行の尊厳性をも表しているともいえる。

宗祖の伝えた念仏は、私の生きる力となり、往相の利他行と連なっていくのではないか。けっして死んでから後のことだけを言っているのではない。今、私に念仏が生きる力を与えてくれているのである。あらためて「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」と関東から命がけで師をたずねた御同行に言われた言葉は、750年の時空をこえて、今私の耳に届いている。

参考文献

- 大谷嬉子『親鸞聖人の妻恵信尼公の生涯』本願寺出版社 2000
 桐溪順忍『桐溪順忍和上追悼論文集』探究社 1986
 重松明久『親鸞・真宗思想史研究』法蔵館 1990
 関山和夫『説教の歴史・仏教と話芸』岩波書店 1978
 田代俊孝『ビハラー医療団・学びと実践』自照社 2012
 林暁宇『坊主は乞食だぞ・願われて生きる』樹心社 2007
 廣瀬果『観無量寿經に聞く』教育新潮社 1964
 深川倫雄『佛力を談ず』永田文昌堂 1984
 『報謝無尽』永田文昌堂 1985
 普賢大円『真宗教学の発達』永田文昌堂 1963
 松原祐善『無量寿經に聞く』〈上巻〉教育新潮社 1968
 靈山勝海『末燈鈔』永田文昌堂 2000
 龍谷大学真宗学会『日本浄土教と親鸞教学』永田文昌堂 1999

参考論文

- 浅野教信「授記を通して見た親鸞教学の特色」『親鸞教学の諸問題』龍谷大学真宗学会編 永田文昌堂 1987
 川添泰信「親鸞浄土教における生死の問題」『仏教の生死観』日本仏教学会編 平楽寺書店 2010
 桐溪順忍「空華学轍の学説」『桐溪順忍和上追悼論文集』探究社 1986
 桐溪順忍「真宗教学の特色」『桐溪順忍和上追悼論文集』探究社 1986
 平雅行「鎌倉幕府と延暦寺」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館 2002
 平雅行「若き日の親鸞」『真宗教学』第26号 2005
 平雅行「『教行信証』後序と奏状」『教行信証の思想』大谷大学真宗総合研究所編 筑摩書房 2011
 平雅行「善鸞の義絶と義絶状」『親鸞像の再構築』大谷大学真宗総合研究所編 筑摩書房 2011
 名畑崇「親鸞の六角夢想の偈について」『親鸞』吉川弘文館 1983
 延塚知道「『歎異抄』から『教行信証』へ」『『教行信証』の思想』筑摩書房 2011